ナチスに協力したユダヤ人
―なぜ彼らは敵であるドイツに手を貸したのか―

山本　優

ナチス政権下のドイツにおいてユダヤ人は迫害された存在だった。言うまでも無くユダヤ人にとってナチスは敵であったが、しかし彼らの中には憎むべきナチスに協力した者もいた。なぜ彼らは敵であるナチスに手を貸したのか、その理由を収容所という世界に焦点を当てて探った。

第一章ではドイツ社会でユダヤ人がどのように解放され、そしてナチス政権下でどのように迫害されていったのか、その過程を追った。一九世紀のドイツ帝国成立と共にユダヤ人は一般ドイツ人と同様の法的な権利を得たのだが、それによってすべての差別から解放されたわけではなかった。民衆の中には反ユダヤ主義的意識が根深く残っており、それは後々のナチスのユダヤ人迫害を許してしまう結果となった。

第二章ではナチスの収容所政策について、アウシュヴィッツを例に挙げて考察を進めた。囚人の生活・労働環境、そして日常的に振るわれていた暴力に焦点を当て、収容所がどのような世界なのかを探った。

第三章では収容所という世界で、ナチスに協力したユダヤ人囚人について取り上げた。主にガス室へと送られるユダヤ人に付き添い、そしてその死体を焼却炉に運ぶという仕事を任務としていた「ユダヤ人特別労務班」。そして実際に囚人の中の幹部として働いていたポーランド系ユダヤ人のエリエゼル・グリュンバウムの話を挙げた。また戦後、彼らがどのような社会的評価にあったのかを辿り、「ユダヤ人特別労務班」やナチスに協力した囚人にどの程度の罪があったのかを考えていった。

収容所という世界において、なぜユダヤ人は敵であるドイツ人に手を貸したのか。それは「そうせざるを得なかった」ということに尽きる。第一に、暴力や過労死、飢えや病気が蔓延する収容所という世界では、恵まれた食料や労働条件のためにユダヤ人囚人がナチスに協力したとしても仕方が無い。第二に、囚人が仕事を拒否することは即座の死を意味した。実際に特別労務班への仕事を断った四百名のユダヤ人が処刑された記録が残っており、命令を受けたが最後、生きるためには任務をこなす以外の選択肢は無かったのである。第三に、本人の意志ではなく周囲の囚人が勝手に、ナチスに協力するための役職に仲間を推薦するということがあった。エリエゼルの例のように彼のリーダーシップに期待して、囚人とナチスの間の緩衝材に成り得るような人物が選ばれていた。

ナチスに協力したユダヤ人に罪があるのか。それは黒か白かという答えではっきりと線引きできるものではない。自分と仲間の命を守るために他者を犠牲したユダヤ人たちは、被害者側から見れば有罪なのかもしれないが、そうしなれば自分たちが死んでいたし、ナチスに究極の選択を強いられた被害者でもある。どの視点に立つかによって、見方や答えが変わる問いであった。

（上三川町役場職員）